
鼻サンドバッグ

プライア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼻サンドバッグ

【Zコード】

Z1697

【作者名】

プライア

【あらすじ】

旧校舎に呼び出された不良女子高生の日崎文はそこで不良男子2人からのリンクに合つ。初めは抵抗したものの次第に力がなくなつた文は不良男子の1人から体を押さえつけられ、自慢の高い鼻にパンチを打ち込まれてしまつ。さらに文を鼻サンドバッグとして文に恨みを持つ不良たちによって徹底的に鼻がいたぶられていく。

そして、文の鼻にどごめをさしたのは・・・

「へへ、来たな田崎。」

「あん？」

ある日文は旧校舎の裏に呼び出す手紙をげた箱の中で発見した。文は他の不良女子から呼び出されていたと思っていたが実は男からのものだった。

「呼び出したのはあんた?まさか告白とかとちやうやうな?」

「なわけねーだろ!お前最近調子のつてるよな!女子が女子に対して調子のるのは勝手だが男に対しても幅効かせやがって。彼氏が副ボスならここまで調子にのれんか?」

「じゃーなに?あんた女に暴力振るうの?」

「男か女か関係ねえ。調子乗ってるやつはボッコだ。」

文は男とともにやつても勝てるわけがないので引き返そうとする。しかしそこにはさりに2人の男が現れた。

「何?あんたら?」

「にがさねーよ。ボッコだ!」

「くつ!なめんな!」

文は逃げ道のところにいる男に特攻をかける。文は男の顔を1発なぐつた。

バコッ

「うおー!」

「へへー!」

ガシツ

「ーー!」

しかし文は殴つたその手を男につかまれてしまった。

ドゴッ ドゴッ

「ぐあつー!」

「おらー!」

バンッ

「きやあ！」

不良男子の一人に2発殴られ、壁に叩けつけられた。女のそれとはダメージがあるで違う。文は体力を削られた。そして最初に呼び出した男が文の側にやつてきた。

「ほれ。」

グニッ

「あつ・・・。」

文は自慢の高い鼻を男につままれた。そしてそのまま摘み上げられ、上へとひきのばされていく。

グニーン

「ああ！」

「はははー！痛いか！」

「な、なにするのぉー！」

「へへへー！もつと引つ張つてやるー！」

グイーーーン

「ああー！痛いー！」

文の鼻はどんどん弓を伸ばされていく。ただでさえ高い鼻が一段と高くなつていいく。

「はんー！かなり高い鼻してんな。こんな高い鼻してのから生意氣になれるんだよ。」

「くう放せー。」

「へん生意氣だな。わてこの生意氣さが少しはおとなしくなるといに、その高い鼻を折つてやるよ。」

「えつーー？」

ブオッ
バスウ

「あああーー！」

男は文の鼻から手を放し、同時に1発文の鼻にジャブを叩き込んだ。文は想像以上のダメージに顔が歪み悲鳴を上げた。

「はああ痛いい。」

「くくく、鼻が高いってのはこりいう時には不便だな。まあこんなのは序の口だ。どんどん折れていく鼻の痛みを感じながら自分の今までの行いを反省しろ！」

「そんな！や、やめろ！」

ガバッ

別の男が文を押さえつけた。これで文は完全に動けなくなつた。

「ははは！これでお前の鼻はサンドバッグも同然だな。そうだ、いふことを考えた。」

「え！？」

「他校とのケンカで相手の鼻を狙つてダメージを『える』感覚をつかむための練習だ。つまり、鼻サンドバッグってことだ。」

「いや！鼻はああ！」

「オラオラオラ！」

バスバスバス

「！うぐつ！…」

バスバスバス

「ああああ…」

とうとう文の鼻への攻撃がはじまつた。男は文の鼻にジャブのラッシュをかける。すでに最初の数発で文の気力が失われはじめた。

バスバスバス

「鼻が…」

バスバスバス

「痛い…」

ムクムク

ジャブを食らい続けた文の鼻は少し赤く変色して腫れてきた。しかし男は遠慮なく文の高鼻にジャブを打ち込む。すぐに折れないよう少しでも長い間苦しむようにじわじわと痛ぶつしていくのである。

1発2発3発…文の鼻は杭にとんかちを打つようじどんどん打ちこまれていく。

バスバスバス

「ううう・・・・・」

バスバスバス

「あううつ・・・・・」

ツ～ツ

文の口からもはやうめき声が漏れはじめた。鼻からは1滴の血が流れ落ちた。しかし次のパンチでその血は引き伸ばされた。また次の血が流れ落ちては同じようになる。

「お前ばかりするいぞ。オレにもやらせてくれよ。」

「分かったよ。でもすぐ折るなよ。たっぷり時間をかけて鼻サンドバッグをなぐつていいくんだ。」

「うぐつ・・・・あ・・・あ・・・」

「了解。おら!」

バスバスバス

「ああああ・・・・・・」

殴っていた男と押さえつけていた男が入れ替わり、今度は押さえつけていた男が文の鼻にラッショウを打ち込み始めた。入れ替わるタイミングに逃げることが出来るほどの体力がすでに文には残つていなかつた。

バスバス

ツ～ツ

「う・・・くつ・・・」

バスバス

ツ～ツ

「いやあ・・・・・」

バスバスバス

「！！」

ドクドクドクドク

「あぐう・う・ぐ・あ」

文の鼻血の量が増した。もはや文の鼻は痛々しく変色している。と
つくに声も力のないうめき声に変わっていた。

「あつれ、何やつてんの！？」

おー里奈に真紀か。今田崎にたゞぶりとお住置をじてゐるだ。

「あー!? 田崎じゃん!? 何? すつげえ無様!!」

ג עי' . . . ג

里奈と真紀は文の不良女子の同期だった。しかし、元々それほど仲はよくなく、文が副ボスの彼女となつてからは文に対して反感を持つようになつていた。

バツグを叩くか?

「やあーやつたー！」

- 1 -

「二つの高い鼻いつか折つてやりたいって思つてたの！」

「ああ。好きだけ呑け。ただまだ折るなよ。もつと時間をかけてじわじわといたぶつてやるんだ。」

「えりたー・れせせせー。」

里奈は文の願いをよそに文の前に立ってハンチを構えた。文は顔の角度を傾けてかわすことも出来ない。

バスウツ

גַּם־בְּעֵינֵינוּ לֹא־יָמַר

「アーリー・シードが、でなーもー、一発！」

卷之三

里奈は一発一発重みのあるパンチを立てる。

里奈は一発一発重みのあるパンチを文の鼻に叩きこんでいく。文は

鼻への激痛でより頭が真っ白になっていく。加えて自分より下に見ていた奴に鼻を殴られていくことに対する屈辱感を感じざるをえなかつた。

そし
て

「おひおひー」れほじうだー」

八五之三

(あ・・・・・)

今の一発が文の鼻に入った瞬間、文は自分の鼻に違和感を感じた。文は嗅覚という五感の一つが司る自分の鼻という器官が今の里奈の一撃で破壊されてしまったことを感じた。

הַלְּבָנָן וְעַמְּקָמָיו

次の瞬間、文の鼻から一斉に鼻血が放射状に噴き出した。

あかあああああああああああああああああああああああああああ

文は痛さのあまり力声で悲鳴を上げた。その様子を見て、里奈と真紀はげらげらと笑い始めた。鼻血を放出しながら憔悴していく文の顔が快感でたまらなかつたのだ。

そしてそのうめき声は詫惋にはなっていなかつ

「
ん
?」

- ၁၅၁ -

卷之三

גַּתְתָּה - תְּרִיבָה

だ
！

バスバスバスツ

「が・・あ・・・はな・・・お・・・れ・・・・・る・・・・・」

バスバスツ

「お・・お・・・・・れ・・・・・る・・・・・う・・・・・」

シャーーー

文はあまりに長時間鼻にパンチを打たれ続け、とうとう心が折れてしまつた。表情はもはやない。あまりに鼻を打たれすぎて鼻を折られるという恐怖心が一杯になり文はおもらしてしまつた。

「ははは！なんて無様だ！おもらしかよだせえ！」

ドクドクドクドク

「へへ！じゃあそろそろ終わらせてやるか！真紀やるか！？」「え！いいの！？」

「ああ！お前の強烈なパンチでこのおもらし女の鼻を一発バキッとやつてくれ！」

「やつたあ！」

「あうう・・・やめ・・・てえ・・・・・・」

文は懇願した。しかしもちろん聞き入れてもらえるはずもなかつた。文にはとつぐにここから抜け出すほどの力はなくなつていた。さうに真紀は元ボクシングの部員であつた。文の運命は潰えたも同然だつた。

「さあ・・いくよ！！」

「やめてええ・・・・・」

「おらああああつーー！」

ブオオオオツ

バスウウウウウウウウツ

（あああ・・・・・）

文の自慢の高い鼻は真紀の突き刺すように鋭い重みのあるストレートによつてしつかりと打ち抜かれてしまった。狙いはしつかりと定められ、タイミングも角度も何もかも完璧だった。文は走馬灯のようにこの一連の流れをスローモーションのように感じた。

(あああ・・・はながあ・・・)

ミシ

(う・・ちこまれ・・た・・・・)

ミシ

(おじ・・つぶさ・・れ・・てく・・う・・・・)

ミシミシ

(ああ・・もうだめ・・え・・・・・)

ミシミシミシ

(あやの・・は・・・な・・・)

ミシミシミシ

(お・・れ・・・・ぬ・・・う・・・・・)

バキイイイイイイイイイイイイイイ

スロー・モーションな感覚の中で文は鼻が少しづつ折れていくのを感じていった。そしてとうとう文の鼻は折れてしまった。ゆっくりとした感覚の中自分の自慢の高い鼻がどんどん果てていくことに屈辱を感じると同時に、恐怖心をも感じていた。文は鼻が折れていく過程で自分が戦意喪失していく様に幻滅した。心は折れた。プライドも粉々になつた。完全な敗北者のごとく、文は本能の赴くまま自分が最も無様にやられる姿を体現していった。

ケーヤアツ

「すげえ!! ぐんにゅりゅーてる!!」

トバアアアアツ

文の鼻からはとす黒い鼻血がまるで滝のようになにげんに噴き出した。文は元々声が高い方だ。しかし、その高い声の面影もないほどに腹の底から発するような重く低い声でうめき声を上げた。文の人生で初めて、しかもこれほど惨めなものが他にないくらいの無様なうめき声だった。

とうとう折れてしまつた文の鼻は悲惨なものだつた。よく通つてい
た鼻筋はぐんにやりと歪み鼻は少し右へと曲がつていた。尖つてい
た鼻先は少し押しつぶされて丸みを帯びほんのわずかだが横へ広が
つていた。

(あ あ)

文の美しさのシンボルであつた高い鼻は破壊され、醜さのシンボルへとなり果てた。文はみんなに自分の不細工になつた鼻を見られることが耐えられなかつた。

「文！」

גַּם-אָמַר

(え・・・・)

「文！その顔・・・」

なんと文の彼氏のヒロキが現れたのだ。ヒロキは目の前でつい今しがた鼻を折られた文の姿にショックを受けた。

「お前ひーー！ でも文をーー！」

ひ
・
・
ろ
・
・
・
き
・
・
・
・
た
・
・
・
す
・
・
・
け
・
・
・
て
・

ヒロキは頭に血が上っていた。そして男子不良の元は凶にはがつた。

しかし

「…が、何が何が？」

「おー！」

ヒロキは真紀に足をひっかけられた。そのため向かう方向が代わつ

そして、なんとその先には盾にされている文がいた。

卷之三

(二) · · · ·

勢いのついたヒロキのパンチは盾にされている文の鼻へ向かっていつた。そしてゆっくりと文の鼻にヒロキの拳が吸い込まれるように入つていった。

ス
ト
リ
ツ

(じんな こと つ て
あああ い や あ)

グシャアアアアアアアアアアアツ

ヒロキの拳はしつかりと文の鼻に打ち込まれて、文の鼻はグシャツ

とつぶれてしまった。ヒロキの拳には文の鼻骨が砕け鼻がぺしゃんこになつていく感触がしつかりと残つてしまつた。

文の鼻は愛する者の手によって完全に破壊されてしまったのだ。

一
あ
・
・
・
文
・
・
・
」

八
三

ブ
ー
ン

「まさか彼氏がとどめを挿すなんてな！」

「あの高い鼻がべつしゃんになつちまつたなーはははー。」

ああああうううう

文は叫ぶ氣力が無くなりただ本能のままにみじめにうめいた。鼻はまつ平らになつた。鼻はぺしゃんこになつてしまつた。あんなに高さが自慢だった文の鼻がぺしゃんこになつてしまつた。

ドサツ

文は仰向けに倒れた。

「兎の口」

ドバードバードバードバ

卷之三

47

「・・・ふあ・・・な・・・・・が・・・・・あ・・・・・」

ムクムクムクムク

ガクツ

ペシャン」にされた文の鼻はそのまま赤く大きく大きくはれていつ

た。そして文は氣を失つた。

「あのや～～田崎文つていたじやん？」

「ああ、あの不良の？どうかしたの？」

「おととこた～旧校舎の裏に男子たちに呼び出されでボコボコ」にされたらしこよ～。ボコボコつていうかバキバキ。」

「バキバキ？もしかして鼻～？」

「そう鼻～。あいつの自慢にしてたあのマジ高い鼻がバキバキだつて。」

「マジで～痛そう～。」

「でもいいじゃん。むくいだよ～むくい～」

「へへ！鼻バキバキか！あの女、いい氣味～」

「ペシャんこにつぶされたつてよ～～ははははは～～～」

「ははは～～見てやりたかつたな～その面～」

ピロリロリーン

「ん？メールだ？。佳奈からだ。タイトル「田崎文の鼻」だつて～」

「マジで見たいみたい！」

ピッ

「はははは～～えぐつ～～」

「うわあ～マジうかる～～ほんまにペシャんこや～」

「」の画像みんなに回やつ～ははは～～

そして文の鼻のつぶされた画像はチーンメールとしていろんなところに回り、もはや隣の県にまで広がってしまった。文は鼻も治らず、しかもこのメールの一件で完全に失墜した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1697j/>

鼻サンドバッグ

2010年10月21日20時27分発行